

市民への口封じ訴訟 SLAPP

とたたかう人たち

批判や反対などで公的に声を上げた市民が、企業や団体から狙い撃ちにされる民事訴訟「SLAPP」。山口県・上関原発の建設現場では、地元住民を「被告」とした反対運動演習が横行している。これも典型的なSLAPP訴訟。原告は中国電力だ。



瀬戸内海の美しい町。お年寄り、子ども、犬までがはちまきをして「原発反対」で練り歩く。

私は原発否定論者ではない。だが「上関原発」の予定地の浜（山口県熊毛郡上関町）に立った時には「何でよりによってこんな場所に」とため息が出た。風と波が刻んだ渚は、山水画のように美しい。透明な海水の中を魚の群れがきらきらしているの見える。コンピュータで埋め尽くされていると思っていた瀬戸内海に、こんなに美しい浜が残っていたとは知らなかった。山陽本線の「柳井港」から七〇人乗りの定期船に一時半乗って、原発予定地の対岸にある離島「祝島」に渡った。人口約五〇〇人。都心の中型マンション一軒分くらいの人数だ。島に信号機はない。コンビニもない。自動販売機は二台。しかも一台は壊れている。午後五時着の船から人が降り、港から消えると、ぱたりと静かになった。「げんばつ、はんたいい」「はんたあい」

月曜の夕方だった。港のすぐそばの街路を、お年寄り、子ども、犬までが



民主主義が

脅かされる

現場から下

運動の先頭に立つ人だけを狙い撃ち

はちまきをして「原発反対デモ」で練り歩いてきた。いつからやっているんですか、と尋ねると、おばあさんが「雨の日を除いて二八年間、毎週。てことは一〇〇〇回以上かね？」と涼しい顔で言った。

本土から瀬戸内海にゾウの鼻のように細長く伸びた上関町で、原発予定地はゾウの鼻の穴の部分に位置する。そして祝島は「鼻先」にある。町内で原発を正面に見ながら暮らすことになるのは、祝島だけだ。町内が賛成派・反対派116:4から7:3くらいで激しく競り合っても、祝島だけが反対ではば団結しているのは、こうした理由もある。受け取れば組合員一人あたり一三〇万円弱が入るのに、祝島の漁協は補償金約一〇億円を拒否している。

こうして三〇年近く続いている「上関原発」反対運動に、事業主である中国電力が約四七九二万円の損害賠償請求訴訟を起こしたのは、昨年二月のことだ。「反対運動によって工事が遅れ、損害が発生した」というのが中電側の主張する訴えの構図だ。被告になっているのは約八〇人のうち四人。島民運動のリーダー格二人と、島で暮らしながら運動に参加している山口県と広島県のシーカヤッカー二人である。続けて中電側は、他の反対派住民も含めて海岸や周辺の家への立ち入りを禁止する仮処分申請を次々に起こした。反対派は刑事告訴されたこともない。もし本当に「過激な反対運動」があっ

たのなら刑事事件になるのが自然ではないのか。

民事提訴なら、刑事裁判とちがっていつでも中電側が好きな内容で起こせる。刑事のように警察や検察が入らないので、内容にチェックもない。裁判所は民事訴訟が提起されれば、書類の不備でもない限りそのまま審理を始める。それだけで、裁判コストは被告の上のしかかる。

祝島と本土の間は、朝と夕方の二便しか定期船がない。裁判の開廷日はもちろん、弁護士との打ち合わせですら、島民が通うのは大変な手間だ。

私が島を訪れた八月下旬、ちょうど中国電力が起こした三つ目の仮処分申請を通知する書類が住民たちに届いた直後だった。被告になった住民たちは民家の一室に集まって夜六時から一時すぎまで対応を相談していた。

「私は長年やっているし、こういう事態を想定していたから、まだいいんです。でも応援に来てくれている人も含め、全体が弱気になって士気が下がるのが一番困る。運動の先頭に立っていますから」

被告の一人、漁業を営む橋本久男さん（五八歳）はそう話す。

訴えられた住民側から出る言葉は、意気軒昂に聞こえる。が、こうして対応に時間と労力を割かなくてはならぬこと自体が、SLAPPの狙いである「裁判コストによる加罰」なのだ。当事者もなかなか気づかない。

一月一九日号の「米軍ヘリ発着場をめぐるSLAPP」では、提訴によ

つて「在日米軍基地の是非」という「社会全体が議論すべき公的な問題」が「工事妨害はあったのか」という「裁判上の論点」に矮小化される「論点のすり替え」が起きたことを指摘した。上関原発訴訟でも同じ現象が起きている。

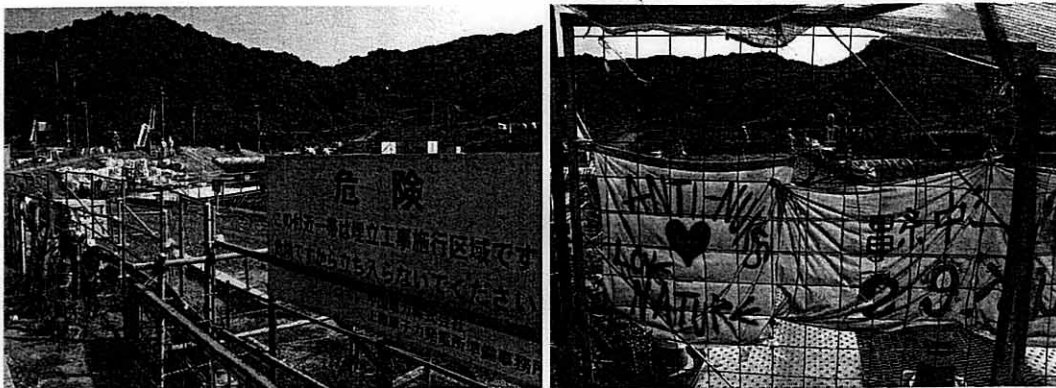
住民側を疲弊させ 消耗させるSLAPP

中電側の訴状には「〇九年一月×日にP（被告）は作業クレーン船の作業をQして妨害した」といった「工事を妨害した事実」が書き連ねられている。が、たとえ中電側の訴えが一〇〇%正しかったとしても「上関町に原発を建設すべきなのか」「日本のエネルギー政策にこれ以上原発は必要なのか」といった公的議論にはまったく何の関係もない。「裁判所内の論争」にすり替えられてしまうのだ。しかもこれらの提訴事実はすべて原告が一方的に選んだ内容であり、意図的に原告に有利に組み立てられている。

ところが、この裁判に負けると、被告である住民側が提起している「上関原発は必要なのか」という公的意見の正当性まで否定されたかのような印象を世論に与える。負けなくても、提訴されただけで「提訴された反対運動もよほどひどいことをしたのだろう」という偏見にさらされる。こうした「反対者・批判者の正当性を奪う」効果もSLAPP訴訟にはある。

そのため、提訴された側は原告が選んだ提訴内容に反論、論破しなくてはならない。ビデオや写真を証拠提出して「工事妨害はなかった」「あっても

山口県・上関町 原子力発電所 建設予定地



中国電力は住民に対し、海岸や周辺の高への立ち入りを禁止する仮処分申請を次々に起こした。

適法である」と証明しなくてはならない。こうして被告側は疲弊し、消耗していく。

「SLAPP」という法理を提唱したジョージ・プリンク教授とベネロビ・キヤナン教授は「事実争いの底なし沼」(fact quagmire)と呼んでいる。ここに反対者を引きずり込んでしまうこともSLAPPの構造なのだ。

「スクールバスのブレーキが故障している、子どもの送迎には危険だ」と親たちが教育委員会に改善を申し入れた。その親たちにバス会社が名誉毀損の裁判を起こした。そんなSLAPPが実際にありました」

プリンク教授は指摘する。
「しかし、裁判所にバスは直せません。バスの安全を確保することこそが公的な論点なのに、それは改善されないまま放置される。バスのブレーキの故障という本当の問題が偽装される。親たちの苦情の文言が名誉毀損かという馬鹿げた裁判上の論点にすり替えられ、被告はその反論を必死でしなくてはならない」

SLAPPにはまだ悪影響がある。
(1) 時間、金銭など資源の無駄遣い。

被告にとっても裁判所にとってもそれは同じ。(2) 批判や反対を沈黙させ、民主主義にダメージを与える。(3) 裁判制度というパブリック・システムへの信頼を損なう。

こうしたプリンク教授の指摘は日本で現実になっているように思える。

そして、もともと深刻なのは、裁判所への信頼が破壊されることだ。上関原発訴訟でも沖繩の高江米軍ヘリ発着場訴訟でも、意見表明の抑圧に民事裁判が悪用されているのに、裁判所は考慮しない。法廷外の裁判コストも考慮しない。最悪の場合は被告を敗訴させる。これでは「裁判所は憲法二二一条が保障する言論の自由を守らないどころか、破壊している」と認識される。裁判所が「民主主義の砦」ところか「敵対派」として機能してしまう。

「SLAPPを防ぐのは、被害者を守るためではない。民主主義を守るためなのです」(プリンク教授)

SLAPP訴訟の「本当の敗者」は「裁判制度」と「民主主義」なのだ。

写真撮影／筆者

うがや ひろみち・ジャーナリスト。

上関原発建設中止を求める ジャーナリスト・言論文化人の会

緊急 声明

内閣総理大臣殿 経済産業大臣殿 中国電力(株)殿

私たちは、山口県上関町ノ浦に、中国電力が上関原発を建設しようとして、いよいよ埋め立て工事に乗り出したことを知り、いてもたってもいられず、工事の中止を求める緊急声明文の発表を決定しました。

上関原発が建設されようとしているノ浦は、希少動物の宝庫として知られています。

生物多様性のモデル地区と言われるこの地域は、瀬戸内海でも珍しく自然海岸が残されてきた地域でもあります。そのためここには多くの天然記念物や希少生物が息づいています。

原発に最も近い、対岸の祝島の漁民は、30年間近くも建設に反対し続けてきました。それは子孫に豊かな自然を残したいという思いからのごとです。

私たちが失おうとしている自然は、かけがえのないものであり、失うと取り返しのつかないものです。

しかも今中国地方で、原発建設を強行しなければ電力が不足するという報告もありません。

この一帯が地震帯であることも、私たちが反対する理由の一つです。

ひとたび事故が起これば、それは上関町だけの問題ではなく、山口県、そして中国地方から四国・九州・関西にまで広がる広域の問題となることは、25年前に起こったチェルノブイリ原発事故が実証しています。

中国電力には、田ノ浦の埋め立てをすぐに中止し、自然と未来を破壊する原発の建設計画を放棄するように求めます。

政府には、原発推進政策を直ちに転換して、自然エネルギー推進政策をとるよう求めます。

2010年10月17日

呼びかけ人 広河隆一(「DAYS JAPAN」編集長) / 平井康嗣(「週刊金曜日」編集長)

「上関町の室津で、ぼくは一九六七年に『愛の讃歌』(倍賞千恵子主演)という作品を制作しました。あのなつかしく美しい風景に原発は似合いません。止めてほしい、と心から思っています」

山田洋次

ジャーナリスト・言論文化人による賛同人リスト一部(2010年11月30日時点で229人)

會田園(ドキュメンタリーフォトグラファー) / アイリーン・美緒子・スミス(環境ジャーナリスト) / 青木理(ジャーナリスト) / 青山貞一(東京都市大学環境情報学部教授) / 青柳拓次(アーティスト) / 明石昇二郎(ルポライター) / 浅野健一(同志社大学教授) / 東武志(俳優・ラジオDJ) / 安達佳織(ラジオDJ) / 足立力也(コストリカ研究家) / 天笠啓祐(市民バイオテクノロジー情報室) / 天木直人(元レバノン大使) / 雨宮処凛(作家・「週刊金曜日」編集委員) / 安斎育郎(立命館大学教授) / アンドリュー・デウィット(立教大学教授) / 飯田哲也(環境エネルギー政策研究所所長) / 池内了(総合研究大学院大学教授) / 池田佳代(OurPlanet-TV理事) / 池田香代子(翻訳家) / 池田こみち(環境総合研究所副所長) / 池住義憲(立教大学院教員) / 石井千春(通販生活編集長) / 石川逸子(詩人) / 石川文洋(写真家) / 石坂啓(マンガ家・「週刊金曜日」編集委員) / 石牟礼道子(作家) / 井田徹治(環境ジャーナリスト) / 伊田浩之(「週刊金曜日」企画委員) / 板垣真理子(写真家) / 市野和夫(元愛知大学教授) / 伊藤力司(ジャーナリスト) / 「リベラル21」 / 伊藤孝司(フォトジャーナリスト) / 井上澄夫(フリージャーナリスト) / 猪俣良樹(ノン・フィクション作家) / 今中哲二(京都大学原子炉実験所) / 今村登(障害者問題研究者) / 岩田好宏(子どもと自然学会顧問) / 岩本太郎(ライター) / 岩垂弘(ジャーナリスト) / 宇井真紀子(写真家) / 上野蓮(ライター) / 鶴飼哲(一橋大学教授) / 宇野八兵衛(フォトジャーナリスト) / 宇野昌樹(広島市立大学教授) / 上中良子(都橋大学教授) / 魚住葉子(DAYSJAPAN) / 生方卓(明治大学教授) / 永六輔(ラジオタレント) / 及川智志(弁護士) / 温野まき(フリーライター・編集者) / 大石芳野(フォトジャーナリスト) / 大熊ワタル(ミュージシャン) / 大野和興(農業ジャーナリスト、日刊レポーター編集長) / 岡真理(京都大学教授) / 奥田みのり(ライター) / 葛城真三(立命館大学先端総合学術研究科) / カクマクシャカ[安村磨作紀](ミュージシャン) / 桂敬一(立正大学講師) / 加藤登紀子(歌手) / 金子勝(慶応大学教授) / 加納実紀代(敬和学園大学教員) / 金城実(彫刻家) / 鎌仲ひとみ(映像作家) / 鎌田懸(ルポライター) / 神尾京子(編集者) / 川崎哲(ピースポート共同代表) / 川上皓一(映画撮影監督) / 川田マリ子(日本ジャーナリスト会議) / 川田豊実(日本ジャーナリスト会議) / 川口直美(元TBSテレビプロデューサー) / 川崎陽子(環境ジャーナリスト) / 河野昭一(京都大学名誉教授、国際自然保護連合生態系管理委員会北東アジア地域担当・副委員長) / 北村肇(「週刊金曜日」発行人) / 北山耕平(編集者) / 國森康弘(フォトジャーナリスト) / 熊切圭介(フォトジャーナリスト) / 熊本一規(明治学院大学教授) / 紅林進(フリージャーナリスト) / 黒田光太郎(名城大学教授) / 黒田征太郎(イラストレーター) / 桑原ヒサ子(敬和学園大学教員) / 小出裕章(京都大学原子炉実験所) / 小寺隆幸(京都橋大学教授・丸木美術館理事長) / 小沼通二(慶応大学名誉教授) / 小林華弥子(由布市議会議員、「ゆいん文化・記録映画祭」事務局長) / 小森陽一(東京大学教授) / 小室等(フォクシンガー) / 紺野茂樹(哲学・倫理学研究者) / コリン・コバシ(グローバル・ウォッチ・パリ) / こんどうなつみ(絵本作家) / 斎藤貴男(ジャーナリスト) / 坂本博之(弁護士) / 坂本龍一(音楽家) / 崎山比早子(高木学校) / 佐高信(評論家・「週刊金曜日」編集委員) / 佐藤秀明(写真家) / 佐藤文則(フォトジャーナリスト) / 椎名誠(作家) / 鳥京子(作家) / 清水昭信(元名古屋市立大学教授) / 志葉玲(フリーランスジャーナリスト) / 芝野由和(長崎総合科学大学長崎平和文化研究所) / 謝花悦子(ヌチドウタカラの家[平和資料館]館長) / ジャン・ユンカーマン(ドキュメンタリー映画監督) / 生源孝浩(京都橋大学教授) / 白石草(ビデオジャーナリスト / OurPlanet-TV代表) / ジーン・イングリズ(サブアラカ農園) / 新谷のり子(歌手) / 新藤健一(カメラマン) / 新藤幸彦(千葉大学経済学部教授) / 辛淑玉(人材育成コンサルタント) / 菅波安(高木仁三郎市民科学基金事務局) / サイエンスト(敬和学園大学) / 杉村昌昭(龍谷大学教授) / 砂川浩慶(立教大学准教授) / 鈴木邦男(著作家) / 鈴木賢士(フォトジャーナリスト) / 鈴木力(編集者・ライター) / 宗建二郎(フリーライター) / 高橋謙(日本大学教授) / 高橋邦典(フォトジャーナリスト) / 高島伸欣(琉球大学名誉教授) / 高島美登里(長島の自然を守る会) / 高田知行(ドイツ連邦共和国公認翻訳士) / 高遠菜穂子(イラク支援ボランティア) / 龍村ゆかり(ドキュメンタリー映画プロデューサー) / 田代紀子(フリー編集者・ライター) / 田中三彦(著述家・翻訳家) / 田中優(著述家、環境活動家) / 谷村智康(フリーライター) / 田島泰彦(上智大学教授) / 武田俊輔(滋賀県立大学人間文化学部地域文化学専攻講師) / 田沼武能(写真家) / 民(画家) / 趙博(芸人) / 土本基子(映画同人、シネ・アソシエ) / 土山秀夫(長崎大学名誉教授) / 辻信一(明治学院大学教員) / てんつまん(映画監督) / 土屋カチ(ドキュメンタリー映画監督) / 寺尾光身(名古屋工業大学名誉教授) / 土井敏邦(ジャーナリスト) / といわゆ(絵本作家) / 東条雅之(ジャーナリスト) / 豊田直巳(フォトジャーナリスト) / 永江朗(フリーライター) / 中川敬(ミュージシャン / ソウル・フラワー・ユニオン) / 中川真希(役者) / 中嶋啓明(通信社記者) / 中村教夫(俳優・作家) / 中村福郎(フォトジャーナリスト) / 那須圭子(フォトジャーナリスト) / 中野佳裕(立命館大学客員研究員) / 中村征夫(写真家) / ナターシャ・グジー(歌手、チェルノブイリ被曝者) / 成田俊一(ジャーナリスト) / 西尾漢(原子力資料情報室共同代表、はんげんぱつ新聞編集長) / 西谷修(東京外国語大学教授) / 西沢江美子(ジャーナリスト) / 仁藤万友美(女性のためのすずめの木相談室) / 丹羽理(フォトジャーナリスト) / 丹羽宏(著述家) / 野村修身(市民情報研究所) / 野田隆三郎(岡山大学名誉教授) / ノーマ・フィールド(シカゴ大学) / 萩尾信也(新聞記者) / 橋本佳子(プロデューサー) / 橋本勝(風刺漫画家) / 橋野高明(同志社大学文学部研究所研究員) / 長谷川公一(東北大学大学院教授[環境社会学]) / 服部孝章(立教大学社会学部教授) / 羽仁進(映画監督) / PAPA U-Gee(レゲエシンガー) / 羽生のり子(在仏ジャーナリスト) / 林典子(フォトジャーナリスト) / 林将之(樹木鑑査作家) / 早瀬源子(くらしきびフィルム実行委員会代表) / ビーター・バラカン(ブロードキャスター) / 日向寺太郎(映画監督) / 樋口健二(フォトジャーナリスト) / 日隈一雄(弁護士) / 平野裕二(編集者) / 布施祐仁(ジャーナリスト) / 広瀬隆(作家) / 藤原寿和(東京都環境局職員) / 福島菊次郎(フォトジャーナリスト) / 福田邦夫(明治大学教授) / プライアン・コバート(ジャーナリスト・同志社大学講師) / 古居みずえ(フォトジャーナリスト) / 星川淳(作家・翻訳家) / 細川弘明(京都精華大学教授) / 本多勝一(「週刊金曜日」編集委員) / 前田実津(フォトジャーナリスト) / まつかわゆま(シネマアナリスト) / 松崎菊也(戯作者) / 松原明(ビデオプレス代表) / 松本徳彦(写真家) / 松本政輝(シカゴ大学大学院修士課程) / 丸山重成(関東大学教員) / 三品真美(歌手) / 南こうせつ(シンガーソングライター) / 宮永正義(あい自然ネット会長) / 宮本ゆき(Assistant Professor DePaul University) / 武藤一幸(ヒューブルズ・プラン研究所運営委員) / 村田泰子(聖心女子大学事務職員) / 室田元美(フリーランスライター) / 杉村伸一(環境キャスター) / 毛利子来(小児科医) / 森達也(映画監督・作家) / 森まゆみ(作家・編集者・文化活動家) / 森住卓(フォトジャーナリスト) / 門司和夫(環境カウンセラー) / 八柏龍児(批評家[社会学]) / 山口正紀(ジャーナリスト) / 山口泰子(ふえみん婦人民主クラブ) / 山口智美(モンタナ州立大学社会学・人類学教員) / 山田洋次(映画監督) / 湯浅正恵(広島市立大学教授) / 横田一(フリー記者) / 横堀幸司(映像作家) / 吉池俊子(アジア・フォーラム横浜) / 吉田タカコ(ノンフィクション・ライター) / ヨシノユギ(立命館大学先端総合学術研究科) / 竜頭万里子(エンアグラム性格学講座・主宰) / 李隆(ライター) / 渡辺一枝(作家) / 渡辺葉(翻訳家) / 綿井健陽(ジャーナリスト) / 綿貫真礼子(サイエンライター) / このほか約200人の言論・文化人以外の方にご賛同頂きました。

上関原発反対声明文への問い合わせは kikaku@daysjapan.net へお願いいたします。